

# 知識探訪

## 多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

### シンガポールに見る、「映える」ヘリテージとしてのプラナカン文化

安里陽子 (同志社大学 <奄美-沖縄-琉球> 研究センター 研究員)



プラナカンのファッションショーでの一場面 (筆者撮影)

近年、マレーシアやシンガポールではプラナカン文化への関心が高まっている。シンガポールでは 2008 年に国家遺産局管轄のプラナカン博物館がオープンしたほか、プラナカン女性のライフストーリーを描いたテレビドラマ (The Little Nyonya) の大ヒットを契機にプラナカンの料理やスイーツを提供するカフェなども増え、プラナカン文化は観光客の目にもとまるようになった。プラナカン文化は、中国・マレー・インド・ヨーロッパの文化が混ざり合ったハイブリッドなものとして一般的に認識されている。シンガポールでは、プラナカン博物館を東南アジアにおけるプラナカン文化のハブとして、プラナカン文化をヘリテージとして位置づける動きが近年活発になっている。

そのプラナカン博物館は 2019 年 4 月から 2021 年度までリノベーションのため閉館することとなり、閉館直前の 3 月中旬には盛大なパーティーが開催された。今年で第 16 回目となるシンガポール・ヘリテージ・フェスティバル (国家遺産局主催) の目玉の一つとして行われたプラナカン文化を体感するイベント (Armenian Street Party: Living Peranakan) がそれである。3 月 15、16 日の午後 6 時から 11 時まで、博物館前の通りにはプラナカン料理やアクセサリなどを販売するブースが並び、特設ステージではプラナカンのファッションショーやダンスが繰り広げられ、連日大勢の客でにぎわった。中でも注目を集めたのは、プラナカンスタイルの結婚式行列のショーである。通りには華やかで伝統的な衣装に身を包んだ一行をカメラに収めようと、スマホを手に多くの人が押し寄せた。

プラナカン博物館は現在閉館中だが、2017 年 10 月にオープンしたチャンギ国際空港ターミナル 4 のヘリテージ・ゾーンには、空港の運営を担うチャンギエアポートグループと、国家遺産局とのコラボレーションで生まれた「プラナカン・ギャラリー」という名のいわばミニ博物館が登場している。さらにヘリテージ・ゾーンには、プラナカンの

ショップハウスを模した店舗が立ち並び一角もあり、中心に位置する 2 つのショップハウスの 2、3 階部分では、定期的にプロジェクション・マッピングが繰り広げられる仕掛けがなされている。そこでは 1930 年代のシンガポールにおけるプラナカンの暮らしの様子がラブ・ストーリー仕立てで展開されるのだが、ディック・リーをはじめとするシンガポールのアーティストを起用するという力の入れようで、見応えも充分だ。

プラナカン博物館でも、そしてチャンギ国際空港ターミナル 4 のヘリテージ・ゾーンでも、プラナカン文化はシンガポールのヘリテージとして位置づけられ、シンガポールをプラナカン文化のハブとしてアピールしている。近年のシンガポールでは、ヘリテージでありながらも思わずスマホで写真を撮りたくなってしまいうようなものとしてプラナカン文化が再創造され続けているかのようだ。



ショップハウスの 2、3 階部分ではプロジェクション・マッピングも (筆者撮影)

#### < 筆者紹介 >

沖縄県生まれ。2001 年フィリピン大学大学院修士課程修了後、放送記者、雑誌編集者などを経て、2017 年同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程修了。博士 (現代アジア研究)。近年におけるプラナカン文化の表象と文化政策との関連性を中心に、おもにシンガポールでフィールドワークをおこなっている。